

今に伝わる昔話

匠探訪

22

共興の七不思議

「七不思議」の話は全国的に、そして世界にもあります。

日本での起こりは、宗教に關係が深い場所やものから生まれたとされ、すでに1238年の記録にあります。のちに各地の奇妙な事柄が「七不思議」として広まったとされています。

市内では、共興地区に伝わっています。

1 「火の玉提灯」 吉崎浜にある石碑の上を紙ふうせんのような赤い火の玉ちようちんが飛ぶのを見て、村びとは驚いた。それは海でおぼれた5人の頭のようにだったという。

2 「亡霊友を呼ぶ」 海が荒れ狂う時、海岸の方から「ヤアホイ、ヤアホイ」と聞こえ、村びとは亡霊が呼んでいるといつて怖がったという。

3 「立木の地蔵尊」 西小笹の妙福寺に大きなクスノキがある。幹の中ごろに大きな穴があり、その中に石の地蔵尊がまつられていた。それが見える日と見えない日があり、村びとは不思議がっていたが、いつの間にか無くなってしまうたという。

4 「八百比丘尼(やおびくに)」 福井県小浜地方に人魚の身を食べてしまったことから800歳まで生きたという八百比丘尼の伝説ある。これに似た伝説が各地にあり、東小笹にもあったという。

5 「御門霊神(みかどれいしん)」 320年前に長谷村で起こった裁判で、さらし首にされた「八右工門」の霊をまつった石碑。「七不思議」の中で、この話だけが史実で、記録も残されている。

6 「かつばの証文松」 吉崎の新堀淵という所にかつばが住んでいて、近くのお寺でいわずらをするので、お坊さんにしかられ「もうしない」と約束し、松の木を植え証文にしたという。

7 「イボ観音」 吉崎の道ばたの「馬頭観音」はイボを治すと信じられ、そのお礼に多くの小石があげられていたという。

共興の七不思議は、昭和30年代に出された本に出ているもので、大正10年(1921)出版の『匠瑳郡誌』では「八百比丘尼」「御門霊神」「かつばの証文松」の3つの話だけが載っています。

今に伝わる昔話や民話、伝説などは明治40年代以降に千葉県下の各郡でまとめられた『郡誌』に記録されたのが原話といえます。そうした話もおよそ100年を経た今日、次第に消えつつあります。

関八日市場図書館 ☎ 73・3746



西小笹にある「立木の地蔵尊」